

改訂の序

好評をいただいた初版の発行より5年がたち、がん化学療法の急速な進歩とともに、この度、改訂版を発行するはこびとなりました。

内容も大きく刷新いたしました。分子標的薬を含む新薬の情報はもちろんのこと、話題のコンパニオン診断薬も追加しました。がん患者の治療に直接携わっている皆さんは、すでに、副作用対策の個別化対応が大切だと実感されていることと思います。高齢者、合併症のある患者が増加している現状、それぞれの患者に合わせた病状説明、治療選択、副作用対策、セルフケアの指導が必要です。本書では呼吸器障害、循環器障害などの合併症をもつ患者の治療についてもまとめました。

また、がん実臨床の第一線で活躍している医師、歯科医、薬剤師、看護師、理学療法士、ソーシャルワーカーなど多職種の方が、できるだけ具体的に実践的な内容になるよう執筆しました。その結果、がん治療で悩んでいる皆さんの力になりたい、という思いが、紙面いっぱいにあふれた本となりました。

がん化学療法の副作用対策にはチーム医療が必須です。チームとして機能するためには、各専門職と一緒に仕事をするというだけでなく、共通の目標と知識の基礎となる“共通言語”が求められています。がん化学療法副作用対策のノウハウが惜しみなくつぎこまれた本書は、がん化学療法に携わる皆さんのよきパートナーになることと同時に、チーム内での“共通言語”としても活躍してくれると確信しております。

2015年10月

千葉西総合病院腫瘍内科
岡元るみ子

初版の序

医療の進歩は、目まぐるしいほどに急激であるにもかかわらず、今、日本では二人に一人がんに罹り、三人に一人がんで亡くなるという時代となっています。がん治療の進歩だけが鈍いということではなく、高齢化社会で、また他の疾患では亡くなる方が少なくなってきたのも一因であると思われまます。

最近のがん化学療法の進歩は著しく、抗がん剤に分子標的治療薬が加わり、内服の分子標的治療薬だけで治癒する例や、あるいは抗がん剤と分子標的治療薬との併用で生存期間の大幅な延長もみられるようになりました。

一方、分子標的治療薬の出現によって、がん化学療法の副作用対策は多岐にわたるようになりました。多くの分子標的治療薬は、がん細胞だけを攻撃し、骨髄抑制はないものと考えられたのが、実は、高血圧、蛋白尿、発疹、浮腫などこれまでの抗がん剤にはなかった思わぬ副作用がみられたのです。また、最近のがん化学療法は、エビデンスとしても明らかに有効であり、従って、患者さんがこれらの多岐にわたる副作用を克服できるように支援し、あるいは予防対策で、より軽微な副作用で済むようにすることにより、治療を完遂させることは大切なことなのです。

がん化学療法が、全ての患者さんに効いてくれることを願いますが、もし不幸にして効かなかった場合でも、しっかり治療ができたと思え、患者さんが納得できることが大事であると思います。

ぜひこの本を活用し、沢山の患者さんが、副作用少なく、治療効果が上がってくれることを願います。

2010年9月

佐々木常雄